

ストーリー中心型カリキュラムの改善とその効果

Revision and Result of the Story-centered Curriculum at an Online Graduate School

根本 淳子^{*1}, 竹岡篤永^{*1,*2}, 高橋 暁子^{*3}, 柴田 喜幸^{*1,*4}, 鈴木 克明^{*1}
 Junko NEMOTO^{*1}, Atsue TAKEOKA^{*1,*2}, Akiko TAKAHASHI^{*3}, Yoshiyuki SHIBATA^{*1,*4}, Katsuaki SUZUKI^{*1}

^{*1}熊本大学大学院教授システム学専攻

^{*1}Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

^{*2}九州大学 経済学研究院

^{*2}Faculty of Economics, Kyushu University

^{*3}熊本大学大学院自然科学研究科附属減災型社会システム実践研究教育センター

^{*3}The Implementation Research and Education System Center for Reducing Disaster Risk, Kumamoto University

^{*4}産業医科大学

^{*4}University of Occupational and Environmental Health

Email: nemoto@kumamoto-u.ac.jp

あらまし:筆者らが取り組んでいるストーリー中心型カリキュラムの改善プロセスの効果を確認するために、改善内容とその効果について確認した。2011年度の実践結果を踏まえて、ふり振り返り活動の効果を高めることを意図した改善を前期・後期それぞれに取り入れた。2012年度の実施結果から、開発者が意図した活動が、タスクの活動状況や記述式のコメントから確認できた。これらの改善によるカリキュラム全体への効果を過年度との比較や成果物の質的分析を行うことで確認していくことが次の課題として挙げられる。

キーワード: ストーリー中心型カリキュラム, 授業改善, 授業評価

1. はじめに

文脈を用いたカリキュラム開発（ストーリー中心型カリキュラム：SCC）は学習者の実践的なスキルの向上を企図しており、本研究はそれを実現する学習環境を構築するための知見を整理することを目指している。筆者らは、所属大学院において R.C. Schank⁽¹⁾が提唱した SCC を活用して学習環境を設計・開発し 2008 年度より学習者に提供し現在に至る⁽²⁾。デザイン研究の一環として例年改善を試みてきており、今回は 2011 年度の実施内容を踏まえ改善した内容⁽³⁾の効果について確認した。

2. 前年度までの課題

2011 年度の実践結果を踏まえ、2012 年では振り返り活動の充実度を高めることを意図した改善に主に取り組んだ（表 1 の下線部を参照）。前期・後期それぞれの振り返り活動の内容とタイミングは異なるが、どちらも開発者側が意図した活動が十分に行われていなかった。

2.1 前期

前期の省察活動は、各科目の内容を単に振り返るのではなく、ストーリーを介して学んだ活動全体をメタ的にふり返ることを意識していたが、2011 年度はタスク投稿を 1 回以上した 13 人の中で、実施者らが意図したメタ的にふり返りができたのは 5 回のうち一人当たり平均 0.09 回（SD = 1.32）に止まった。

2.2 後期

後期の省察活動は、期の学習活動を 3 つに分割し、各期開始時に学習スケジュールの計画書を作成し、

各期最後に実施報告を行った。第一期の計画書は学習開始前に全員から提出があったものの（13 名）、2 期と 3 期それぞれで提出される計画書と報告書の中には、計画書と報告書がほぼ同じタイミングで投稿され（2 期：4 名、3 期：5 名、各タスク実施者 12 名中）、本活動の目的が十分に果たされていなかった。学習全体が押し気味になる 2 期の報告書作成活動以降は指定された締め切りに提出された課題はほとんどなかった（2・3 期報告書各 1 名、3 期計画書 0 名）。

3. 改善内容

そこで次のように前期と後期の活動を変更した。前期では、2011 年度コンピテンシーをリフレクションの枠組みとして使うことで、当該科目を学ぶにあたって修了生コンピテンシーと関連づけ、どれほどの程度高まったのか振り返らせていたのに対し、2012 年度の改善においてはストーリーを介して学んだ自分という立場での振り返りを意識させるように、振り返るように指示を変更した。変更点は、1) 対象科目はストーリーの中で課題に取り組むために役に立った点があったかどうか、また役立った場合、具体的にどのような点が役立ったのか、2) 修了生コンピテンシーとどのように関連づけられているか、3) 学習者ではなく設計者側の立場に立ってストーリーと課題の関連性について、改善策なども含めを検討することであった。指示を具体化することで、学習内容のみをふり返るのではなく、ストーリーで学ぶ活動全体をメタ的に捉えることを明示した。

後期は、スケジュールを立ててから学習活動に入るように、また、全体の見通しが立つようにふり返

りの手順を変えた。変更点は大きく二点ある。ひとつは、スケジュールリングは期ごとに行うのではなく、後期の開始時に見通しが立つようにまとめて行い、計画書作成の時間を確保した。もう一つは、期の始めに実施した計画書作成を取りやめ、各期の最後に報告書作成による振り返りのみを残し、報告書作成時にそれ以降の計画を必要に応じて修正する活動に変更した。

4. 実施結果

改善した結果から、以下の点が明らかになった。

4.1 前期

科目ごとのふり返し活動において、ストーリーによる学習活動を指示文にある3点を満たす記述は、5つのタスクのうち一タスクにあった1件以外はすべてであった（一人あたりの投稿平均数 4.2 件、SD=1.5）。これによって、筆者らが意図したふり返し活動がほぼ実現できていたことを確認できた。また、後期の授業最後に収集した記述式の意見には、科目ごとのふり返しを行うことで理解を深めることができた（3件）、客観視できた（1件）という記述があった。

4.2 後期

後期開始直後に実施した計画書の作成は全員が各科目の学習活動開始前に行った。これによって、全員が学習開始前に計画を立て、計画の後づけは無くなった。また、1・2期のふり返し活動は、指定した締め切りよりも遅れた人もいるが、次の期の学習活動を開始する前にすべて行われていた。活動の振り

返りとそれを踏まえた計画の変更が行われ、これによって、筆者らが意図した学習プロセスが担保されるようになった。

後期の授業最後に収集した記述式のデータでは、計画を立てて活動することで科目の関連性が見えた（2件）、計画を立て活動することに対する達成感を得られた（2件）、計画を立てることの重要性を確認した（1件）といった肯定的なコメントを確認した。

5. まとめ

本発表では、筆者らが取り組んでいるストーリー中心型カリキュラムの改善プロセスの効果を確認するために改善内容とその効果について確認した。2011年度の実践結果を踏まえた修正内容は、開発者が意図した活動へと改善されたことを確認できた。これらの改善によるカリキュラム全体への効果を過年度との比較や成果物の質的分析を行うことでさらに確認していくことが次の課題として挙げられる。

参考文献

- (1) Schank, R.C. :“The Story-Centered Curriculum”, eLearn Magazine, Feature Article, 47-1, Association for Computing Machinery (2007)
- (2) 根本淳子, 柴田喜幸, 鈴木克明: “学習デザインの改善と学習の深化を目指したデザイン研究アプローチを用いた実践”, 日本教育工学会論文誌, Vol.35, No.3 (特集号: 新時代の学習評価), pp.259-26 (2011)
- (3) 根本淳子, 竹岡篤永, 高橋暁子, 柴田喜幸, 鈴木克明: “ストーリー中心型カリキュラムのための学習環境の構築”, 日本教育メディア学会ワークショップ (2013.1.26)

表1 2012年度の改善内容（根本ら⁽³⁾から抜粋）

開発体制	<ul style="list-style-type: none"> ● GSIS-SCC チーム独自開発 	<ul style="list-style-type: none"> ● GSIS-SCC チーム独自開発
全体設計	<ul style="list-style-type: none"> ● 4年次の統合型カリキュラム演習 I, II を継承（軽微な修正） ● 初年次の全体設計を引き続き継承 	<ul style="list-style-type: none"> ● eL 推進機構での活動を拡張した設計に変更 ● SCC 対象科目に「特別研究 I」を追加 ● グループメンバーを半期統一
ストーリーライン	<ul style="list-style-type: none"> ● 3年次のストーリーラインを継承（シナリオを洗練するための軽微な修正のみに留める） 	<ul style="list-style-type: none"> ● MTM 文脈を完全に取り除き、熊本大学 eL 推進機構でのインターン文脈に一本化 ● 3つのミッションに変更（「eラーニング教材設計書」に「研究計画書」「eラーニング推進機構への提言」を追加）
指導方略	<ul style="list-style-type: none"> ● 動的な登場人物として「竹岡先生」を設定 ● 花見会の実施、小山秘書経由で中村部長からの個別返信、優秀なレポートへ社長賞の贈呈を追加 ● 中村部長メールで遅延者への言及を強化 ● 秘書室を廃止 ● <u>リフレクション活動強化のため、統合型カリキュラム演習 I のタスクの指示文に、振り返りの観点を簡条書きで明確に提示</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ● 中村部長からの別れの挨拶を追加 ● 熊本大学 eL 推進機構でのインターン文脈の後期カバーストーリーを追加 ● 学習計画の範囲を変更（期ごと→3期全体） ● <u>期ごとに業務報告書の作成と計画書の見直しをする指示を追加（業務が未完了であってもその時点でのリフレクション活動をすることを徹底）</u> ● 週毎のメッセージを、今週の進め方を中心にしたものから、「前週の振り返り」「今週の進め方」「直近イベント情報」の3構成に変更
運用	<ul style="list-style-type: none"> ● SCC 対象科目の課題締切日を SCC 選択者が否かで差別化 	<ul style="list-style-type: none"> ● <u>後期開始時に計画書を作成する時間を十分に確保（準備週の設置）</u> ● SCC ホームのスタイルを、ガントチャート風から前期に合わせたカレンダー風に変更 ● SCC ホームに選択科目の進捗表示を追加